コラム④

「コロナ」の語られ方：教員の自由記述より

浜島幸司
（短期大学講師）

2020年２月より新型コロナウィルス（COVID-19）が蔓延し、世界規模での影響がみられた。人から人へのウィルスの伝染を防ぐために、経済活動や人々の移動の制限、日常生活の習慣改善（禁止）などの変化を余儀なくされた（とはいえ、否定的なことだけでもない）。

学校現場への指示も多々あり、教員・児童・保護者・その他多くの関係者が巻き込まれた。教員たちはこの事態をどのように理解し、評価しているのか。今回、「これからの小学校教育のあり方」（Q18）に関する自由記述の中に「コロナ」を含めた記載が12名より寄せられている。全回答の763名からすれば、ごく少数の記述といえるが、本調査はコロナに関して設計したものではなく（質問票にもコロナの文言はない）、回答者自身が自発的にコロナという単語を使い、これからの小学校教育のあり方を自由に論じた貴重な「声」だ。彼らは今回のコロナをどのように評価し、今後の教育改善につながるものと位置づけているのか。

以下に12名の記述内容を抜粋してみた（筆者によって「コロナ」を太字、関連文章に下線を付し、長文の記述がある場合は一部割愛した）。

29歳以下

①**新型コロナウィルス**による影響で、様々変化したように、今後も予想できないようなことが起きる可能性があります。そういった変化に対応していかなければいけないと思います。その中の一つとしてICT機器に関する知識をもっと多くの先生が身につけ、活用していく力が必要だと感じます。（男）

②ICTの導入といった**コロナ禍**と共に少しずつ学校の環境も変わっていき、どうしても初めての取り組みは四苦八苦していますが、その分より良い学校になっているように感じます。（男）

③**コロナ禍**の中で公務員という職業は安定しているはずなのに、なぜ教員を目指す人が少ないのだろうと、教員になる前の素朴な疑問でした。やはり教員になって分かったことは、一人担任に対しての仕事量が多すぎるのも１つの要因なのかと考えました。（女）

30-39歳

④子供の家庭の状況や**コロナ**など様々な実態に応じて、いろいろと変えていくことも必要なのだと思います。（女）

⑤**コロナ**を機に運動会等の行事の時間短縮が行われたことを良い機会にし、これを継続していくことで、働き方改革につながるのではないか。（女）

40-49歳

⑥変化の激しい社会、多様な価値観、GIGAスクール関係、**コロナ**対応、働き方改革等、教員視点で解決困難だったり、時間が足りなかったりするものが多い。子どもたちに行き届いた教育

活動を行うためにも、地域人材の活用、人員の増員（教科担任制、フリーの教員の充実）などが積極的に行われ、組織やシステムの強化につながればいいと思う。(男)

⑦これまで小学校教育の中にたくさんの物が入ってきたが、入ってくるばかりで、なくすものはほとんどなかった。しかし**コロナ禍**で中止するものも出てきて、やらなくても良いものもあったのではないか、と考えられるようになっている。どれもこれも子供たちのためにならなくないものはないが、本当に必要なもの、効果があるものを取捨選択していく必要があると思う。(男)

⑧働き方改革や**コロナ**の影響で、行事の見直しがされているが、本来なくしてはいけない。例えば校外（市の）音楽会までなくしてしまう動きがある。…(中略)…ICT教育が進む中、心を育てる教育活動はぜひ残すべきだと考える。(女)

⑨古いものにとらわれず、大切な部分を残しながら、**コロナ**後の学校教育活動が変わっていくといいと思います。子供たちの自己実現につながるような関わりをしていきたいです。(女)

50-60歳

⑩**コロナ**の前と後ではかなりの変化があった。今までの当たり前が当たり前ではなくなった。時代に合う教育は必要である。(女)

⑪学校と保護者、地域の方の連携が大切。**コロナ禍**でなかなか人との交流が難しい時代だが、本来のあるべき姿へと戻していきたい。(女)

⑫教師になって30年になるが、日々の忙しさは新任の頃より増してきている。…（中略）…１番大変だと思うのは、子どもたち１人１人に丁寧に対応しなければならないこと。学習面だけでなく、生活面や生徒指導面での対応の方に時間がかかる。それを怠ると保護者が出てきて余計面倒になる。学校に対する信頼が薄れてきているのではないか。特に**コロナ**禍で顔が見えなくなった分、教師と保護者の距離が遠くなったように感じられる。(女)

記載内容をまとめると、「**他の社会環境の変化とコロナが同列に語られる**（②④⑥⑨）」、「**コロナ前と後の変化を体感している**（①⑩）」、「コロナに関係なく、**そもそも教員の仕事が多すぎる**（③）」、「コロナで**学校行事が減ったことは良い**（⑤⑦）・逆に**減らしてはいけない行事がある**（⑧）」、「コロナによって**人間関係の難しさを感じる**（⑪⑫）」となる。

感染者数の多さは見過ごせないとはいえ、コロナが教員・関係者への心身、学校制度・環境に対して直接的な影響を与えてはいない。むしろ、コロナは間接的（コロナを理由に制度が変更される、コロナを理由に対人関係が物理的に制限される）な影響を与えたと語られている。言い換えれば、「コロナが不安」なのではなく、「コロナが不安だということで、唐突に変更されたやり方が不安」なのだ。従来のやり方を変えたいときに、この「コロナのせい」はとても都合がよかったといえるだろう。そもそもコロナとは無関係な社会変化（地域社会、家族関係、経済格差、政治体制、ICTインフラ等々）が小学校教育の困難をすでにもたらしていたが（教員たちも現場にいるので知っている）、これを機に変化の理由をすり替えることができたのだ。

もちろん、児童を預かる学校や教員が混乱してしまえば事態の収拾がつかない。最善の策を信じ、現場は変化に適応していく。非日常も続けば、日常へと変化する。コロナに慣れてしまうのも気がかりだ。ウイルスよりも人間（社会）のほうが怖い。そして不安の種でもあるのだ。